

第2回公開研究会

「都市新媒体与近代上海」(都市のニューメディアと近代上海)

会 場：中国 上海師範大学

孫安石（非文字資料研究センター研究員）

[illegible]

例えば、上海の各大学（華東師範大学、復旦大学、上海師範大学など）や学術研究団体（上海社会科学院歴史研究所、上海市檔案館など）では大型の都市研究プロジェクトが次々と立ち上がり、その研究成果の集大成として「上海城市社会生活史叢書」の第1期（12冊）がすでに刊行を終え、第2期（14冊）の計画が進んでおり、中国側の刮目すべき勢いを感じることができる。このよう



写真1 上海会議の様様



写真2 上海会議の開幕挨拶を終えて。大里浩秋教授(神奈川大学、左)と楊劍龍教授(上海師範大学、右)

な勢いを感じさせるのが、2011年7月に上海社会科学院歴史研究所で開催された国際シンポジウム「新知識 新学科 新職業」の開催であった。同会議には中国、日本、韓国、香港などから合計18本の上海と都市研究に関連する報告が用意され、精緻な議論が展開された。今回の上海会議は、実は以上のような背景のもとで開催されたものである。

それでは以下、城山氏の「学会レポート」と重複しないように配慮しつつ、幾つかの報告の内容について紹介しておきたい。

まず、岩間一弘氏の報告は、1920年に入り初歩的ながら大衆消費社会に突入する上海にクリスマスとサンタクロースがどのように導入されたのかを、『申報』、『新民晩報』などの新聞資料をもって後付けしようとしたものであった。氏は上海の新聞広告に登場するサンタクロースの広告から話を始め、1920、30年代の上海の百貨店

が展開したクリスマス商戦について紹介した後、日中戦争と文化大革命を経て息を潜めていたクリスマス商戦が1980年代以降に再び表舞台に登場する一連の過程を紹介した。このテーマは、上海の大衆消費社会の形成や都市中間層の形成について優れた先行研究(『上海近代のホワイトカラー』研文出版、2011年)を発表している氏の問題意識が反映されたものであったと言える。アメリカの大衆消費社会を象徴するマクドナルド、コカコーラ、そして、ディズニー映画に登場するシンデレラとミッキーマウスは、上海でどのような変容を成し遂げるのか、多くの人の興味を引く問題である。

次に、江文氏の報告は、欧米との接触から新たに登場した職業である「新聞記者」が、1920年代の上海でどのような生活(日常、給料、執筆活動など)を営んでいたのかを紹介するものであった。その指摘によれば、1920年代の後半には大学を卒業した女性の記者への進出もみられ、1945年以降には上海を代表する新聞『申報』や『新聞報』など多くの新聞社が女性の新聞記者を採用したという。1930年代に入って組織された「新聞記者公会(協会)」は、日中戦争という混乱した時代を挟み、正常な活動を展開することは不可能であったが、中国の知識人層を形成する新聞記者の動向は国民党にも共産党にも、そして日本にも大きな影響を与えたものであったことを考えれば、新聞記者という職業層に関する研究は今後大きな進展が望まれる分野である。

徐青氏の報告は、満州事変後の日本の上海イメージを『犯罪科学』(1930年6月創刊～1932年12月廃刊、東京、武俠社)という雑誌を取り上げて分析したものであった。従来の日中関係史の研究において2国間の関係は、主に両国の官僚(日本を訪問した官僚や外交官)、新聞や雑誌の記事、そして、文学作品などによって検討されてきたが、上海とは何の関係も想定されない『犯罪科学』という雑誌が上海研究号の特集記事を組んだ理由はどこにあったのか、を論じた徐清氏の報告は、1930年代のマスメディアの発達により「危険で、犯罪的で、欧米列強に支配された、遅れた」上海という「負のイメージ」が日本で定着したことを指摘するものであった。氏の報告は、中国における日本研究や日中関係史研究が取り上げる日本関係の研究素材がさらに一歩進んでいることを窺わせてくれるもので、今後の動向は注目に値する。

一方、神奈川大学の非文字資料研究センターが進めている図像資料を取り上げた研究手法とほぼ同じ枠組みを使った姚霏氏の報告は、「図像資料からみる清末の女性



と都市空間」をテーマにしたもので、『申江勝景図』、『飛影閣画冊』、『点石齋画報』など旧来の資料を利用しつつも、図像資料を歴史資料として読み込むことの重要性を指摘するものであった。但し、姚霏氏の報告を聞きながら感じたことは、歴史、演劇、建築、服飾など異なる研究領域をもつ専門家がディシプリンを越え、横断的に協力し、「非文字」資料を読み解く共同研究を進める状況は、まだ十分に整備されていないようだという点だった。

また、ラジオと映画館というメディアを取り上げた報告も二本、行われた。張姚俊氏の報告は、1920年代を前後した上海に登場した外国資本のラジオ放送について触れ、ラジオ放送が都市の発展と人々の日常生活にいかなる影響を及ぼしたのか、を論じたものであった。しかし、その根拠となった資料が上海檔案館編『旧中国的上海廣播事業』（1985年）を頼っていたこともあり、新たな知見を展開するには及ばなかったように思えた。上海市檔案館には1920年代のラジオの草創期から1940年代の汪兆銘支配下の上海のラジオ放送の実態について、そして、1950年代以降の「上海人民廣播電台」にいたるまでの、詳細なラジオ関連檔案が現存しているので、今後のさらなる研究が期待される。ちなみに、趙凱主編『上海廣播電視志』（上海社会科学院出版社、1999年）は、草創期の上海のラジオ放送に関わった関係者のインタビューを掲載しており、大いに活用することができる。

劉暢氏の報告は、1920年代に設立された上海の映画館について分析を加え、映画館の場所が上海の都市空間にどのように配置されていたのか、その意味を論じたものであった。それによれば、当時の上海の開封館と二番館、三番館の配置は、それぞれ南京路とバンド（外灘）を中心とする商業中心地、共同租界とフランス租界の文化区域、租界の中国人の居住地域に分布していた、という。確かに上海の都市発展と娯楽施設の空間配置の相関関係をとらえ直そうとする意欲は理解できるものの今後、その他の娯楽施設（例えば、ダンスホール、レストラン、ホテルなど）の空間配置との関係を加える必要があるのではないか、という疑問をもった。それと同時に、同じ問題意識を欧米の娯楽施設ではなく、中国人の娯楽施設（茶楼、戲園など）に向けた時にどのような空間配置の相関関係が見て取れるか、大いに興味がそそられるものであった。近年は、中国でも空間を軸とする地理学と、時間を軸とする歴史学の融合が盛んに言われ、上海では復旦大学、華東師範大学、上海師範大学などが歴史地理研究を取り上げた研究活動を展開している。関連す

る研究動向にも注意する必要があるだろう。

以上、2011年度の上海会議の開催の経緯と城山氏が触れていない報告を中心に個人的に感じた幾つかのことを思いつくままに記した。東アジアの都市研究をテーマにした巡回会議を呼びかけた私たちのささやかな試みは、2013年春にはソウル市立大学に引き継がれて開催することになり、私たちも参加する予定である。同大学の「都市人文学研究所」<http://ihuos.uos.ac.kr/> は中国、日本、インド、シンガポール、アメリカ、ドイツなどを含めた「アジア都市フォーラム」（Asian Urban Forum）を組織することを目指しているという話を聞く。

また、2012年7月には上海社会科学院歴史研究所で「外国の文献にあらわれた上海と中国」をテーマにした国際シンポジウムが開催される予定であるという情報にも触れている。東アジアの近代都市の形成に大きな影響を与えた租界と居留地を取り上げた各国の都市研究の勢いはいましばらく続きそうである。

しかし、すべてが明るい話題ばかりではない。どこでも急造の成果が求められ、研究者は大部分の時間を証拠書類の作成にふり回さなければならなくなったからである。いくら優れた制度や組織が用意され、莫大で潤沢な研究経費が確保できたとしても、知のパラダイムを支える自由という風土が確保されなければ、新たな発見と創造は生まれるはずもなく、形式と動員という呪縛が残るのみではないか、と危惧する昨今である。

国際シンポジウム 「都市新媒体与近代上海」参加記

城山拓也（大阪市立大学非常勤講師）

二〇一二年二月二五、二六日、上海師範大学で行われた国際シンポジウム「都市新媒体与近代上海」に参加した。このシンポジウムは、上海師範大学都市文化研究中心、神奈川大学非文字資料研究センター、そしてソウル市立大学都市人文研究所という三大学の共同主催で、中国、日本、韓国における研究者が一堂に会して、メディアと近代上海というテーマについて議論を行うことを主旨としている。

この三大学主催でシンポジウムを行うのは、今回がはじめての試みである。そのために、当日はそれぞれの報告者の研究について、互いに紹介し、交流をするという意味合いが強かった。まずは当日のプログラムをまとめておこう。

国際シンポジウム「都市新媒体と近代上海」（都市のニューメディアと近代上海）

二月二五日午前

第一セッション「都市新媒体与中国社会」（都市のニューメディアと中国社会）

司会：楊劍龍（上海師範大学）

蘇智良（上海師範大学）「『申報』与近代中国」（『申報』と近代中国）

孫安石（神奈川大学）「在上海発行の日本の報刊—以《上海新報》与《上海案内》為中心」（上海で発行された日本の新聞・雑誌—『上海新報』と『上海案内』を中心に）

金承郁（ソウル市立大学）「『銀行周報』（一九一七—一九二五年）和近代上海的銀行業」（『銀行周報』（一九一七—一九二五年）と上海における近代的銀行業）

コメンテーター：村井寛志（神奈川大学）、謝俊美（華東師範大学）

二月二五日午後

第二セッション「報刊与都市文化」（新聞・雑誌と都市文化）

司会：戴鞍鋼（復旦大学）

楊劍龍（上海師範大学）「媒体視閥中《新青年》封面与挿図的文化韵味」（メディアとして見る『新青年』の表紙、および挿絵の文化的情趣）

李培徳（香港大学）「月份牌広告画与中国摩登女性（一九二〇至三〇年代）」（日めくりカレンダーの広告、および中国のモダンガール〔一九二〇から三〇年代にかけて〕）

鈴木将久（明治大学）「浅析鲁迅与瞿秋白有関翻譯的討論」（鲁迅と瞿秋白の翻譯に関する議論をめぐって）

城山拓也（大阪市立大学非常勤講師）「關於一九三〇年代中後期的中国現代主義文学—以《小説》、《文芸画報》、《六芸》為中心」（一九三〇年代中期以降における中国モダニズム文学について—『小説』、『文芸画報』、『六芸』をめぐって）

湯哲声（蘇州大学）「中国近代伝媒与中国文学現代化轉型」（中国の近代メディアおよび文学の近代化）

中村みどり（早稲田大学）「上海現代派改写的日本主義小説—以《蝴蝶夫人》為中心」（上海の現代派が書き換えたジャポニズム小説—『お蝶さん』を中心に）

洪煜（上海師範大学）「近代報刊与都市文化研究—以近代上海小報為中心的考察」（近代の新聞と都市文化研究—上海の小報を中心に）

林春城（木浦大学）「懷旧、記憶、歷史—以彭小蓮の“上海三部曲”為中心」（懷旧、記憶、歷史—彭小蓮『上海三部曲』を中心に）

第三セッション「報刊与近代社会」（新聞・雑誌と近代社会）

司会：孫安石（神奈川大学）

謝俊美（華東師範大学）「報刊与近代国民性的形成—以《杭州白話報》為例」（新聞・雑誌と近代的ナショナリティの形成—『杭州白話報』を例として）

岩間一弘（千葉商科大学）「聖誕老人来到了上海—從報紙看聖誕消費的社会史初探」（サンタが上海にやって来た—新聞から見るクリスマス消費の社会史初探）

江文君（上海社会科学院）「無冕之王：近代上海的新聞記者」（無冠の帝王—近代上海の新聞記者）

戴鞍鋼（復旦大学）「《江南商務報》与一九〇〇年的上海及江南」（『江南商務報』および一九〇〇年の上海、江南）

韓智恩（ソウル市立大学）「場所記憶媒体的“歷史景觀”—以利用近代歷史景觀的上海城市再生為例」（場所を記憶するメディアとしての“歷史景觀”—近代的歷史景觀を利用する上海の都市再生を事例に）

邵雍（上海師範大学）「晚清上海画報中的都市妓女」（清末上海における画報の中の妓女）

姚霏（上海師範大学）「從圖像看晚清上海女性与城市空間—兼論圖像学在歷史研究中的運用」（図像資料から見る清末の上海女性と都市空間—および歴史研究におけるイコノロジーの使用について）

石川照子（大妻女子大学）「在上海工作的日本女性—其現状及媒体欲向學生們伝達的事情」（上海で働く日本人女性—その現状とメディアが学生たちに伝えたこと）

二月二六日午前

第四セッション「電影、広播与近代中国」（映画・ラジオと近代中国）

司会：謝俊美（華東師範大学）

張景岳（上海音像資料館）「用電影記錄上海的經典之作—評前蘇聯紀錄片《上海紀事》」（記録映画の名作から見る上海—旧ソ連のドキュメンタリー『上海記事』を評す）

富井正憲（漢陽大学）「影像中的亞洲都市研究—清水宏導演的《京城》」（映像におけるアジア都市の研究—清水宏監督『京城』）

張姚俊（上海市檔案館）「二〇世紀二〇年代上海的外商電台及其影響」（二〇世紀二〇年代上海の外資系ラジオ局とその影響）

劉暢（上海師範大学）「都市文化視野下的二〇—三〇年代上海電影院」（都市文化として見る二〇、三〇年代上海の映画館）

徐青（復旦大学後期博士課程）「九一八事變爆發後日本の上海認識—以新雑誌《犯罪科学》為中心」（満州事変勃発後の日本における上海認識—新雑誌『犯罪科学』を中心に）

内田青蔵（神奈川大学）「關於由R・H・布朗頓整修的横浜居留地下水道（之一）」（R・H・プラントンによる横浜居留地の下水道整備について〔その一〕）

大里浩秋（神奈川大学）「近代日本租界的研究課題」（旧日本租界研究の課題）

田島奈都子（姫路市立美術館）「從戰前日本制作的海報中可見的“中国主題”的存在及其思路」（戦前期の日本で製作されたポスターに見られる“中国モチーフ”の存在とその考え方）



このプログラムを見ても分かるように、二日間の日程において、報告者が二十七名にも上るという盛り沢山の内容である。報告者の専門も、歴史学、文学、社会学、建築学、美術など多岐に渡っており、多様な角度から近代上海について議論しようとする意志に満ち溢れていた。こうした豊富な内容により、各セッションにおいて、中国語を母語とする研究者は一〇分、それ以外の研究者には二〇分の時間が与えられていたが、あっという間に時間がなくなってしまった。

本稿では、誌面の都合上、すべての報告を詳細に紹介することはできない。ここでは、文学を専門とする筆者の立場から、当日の議論と交流の様子を追うことにしよう。

第一セッションは、基調報告という性格が強く、中日韓の三カ国の報告者、それにコメンテーターによる議論、および交流が行われた。例えば、筆者の場合、韓国の中国研究に疎いため、金承郁氏の議論が拝聴できたことは嬉しかった。金承郁氏の報告は、『銀行週報』という雑誌を分析して、当時の上海において、「銭荘」とは異なる、新たな経済感覚が生みだされていたことを指摘するものである。近代化と経済とは、切っても切り離せないものだというのを、私などは痛感したのだった。

本シンポジウムに関して、私個人が得たものの一つとしては、研究対象に対する研究者自身の方法論、あるいは態度の多様性である。例えば、第二セッション「報刊与都市文化」の主眼は、近代上海にある一定の歴史を前提するのではなく、むしろ歴史を生み出してきた枠組みを問うことにあった。楊剣龍氏の報告は、「五四新文化運動」の陣地と見なされる『新青年』を、表紙や装丁などの形式面から捉え直そうとする。李培徳氏は広告ポスター「月份牌」について、特に煙草会社の事例に注目して、そのモダンガールの表象を分析した。あるいは、鈴木氏、中村氏の報告は、当時の上海の作家が、翻訳を通じていかに海外の文化を書き換えたのかを議論する。これらの報告は、文化そのものというよりも、文化を映し出す枠組み（＝メディア、媒体）を問うことで、上海への新たな視野を獲得しようとする試みと言えるであろう。

個人的に関心を持ったのが、洪煜氏による「小報」に関する報告である。「小報」は、『申報』などの大手新聞と異なり、その量も種類も膨大であり、いまだ全貌をうかがい知るに至っていない。洪煜氏の発表は、その「小報」を発掘、整理することにより、現在の我々の知る近代上海を、ラディカルな形で相対化しようとするのであ

る。同じ意味で、湯哲声氏、林春城氏の議論も、清末、それに同時代と、歴史的背景は異なるものの、これまで研究者が前提としてきた枠組みに、疑問符をつけようとしていた。なお、私（城山）の発表も、これまで看過されてきたモダニズムの雑誌に注目して、新たな歴史的位置付けを行おうとする試みである。

このように、第二セッションでは、研究対象を重視することはもちろん、研究に対する我々の姿勢、あるいは前提を問い直そうという意志に満ち溢れていた。

研究対象に対する姿勢という面では、続く第三セッションは、文学を研究する身として、かなり勉強になったセッションであった。このセッションは、主に歴史学の立場から、メディアと社会について議論がなされている。実は、本シンポジウムは、歴史学を専門とする参加者が中心となって立ち上げられているため、直球ドストレートの内容ということができるのだ。

第三セッションでは、まず、これまで看過されてきたメディアに注目して、新たな歴史的位置づけを行う試みがなされた。謝俊美氏の報告は、『杭州白話報』を掘り出して、清末における地方の新聞において、いかに西洋の啓蒙思想が受容されていたかを分析する。また、戴鞍鋼氏は、『江南商務報』を取り上げて、清末における社会経済の様相にスポットを当てた。その一方で、逆に有名なメディアに対して、新たな角度から分析を行う報告も行われている。例えば、岩間氏は、『申報』、『文匯報』、そして『新民晩報』などのメディアを用いて、消費文化がいかに上海に本土化したのかを検討する。江文君氏の報告は、主に『新聞報』を通じて、名をなした知識人ではなく、無名の新聞記者の役割に注目するものだ。これらの報告は、いずれも実証的かつ着実な態度で、近代上海の様相を書き換えようとする試みである。

同じく、図像研究、ジェンダー研究などの角度から、最新の成果も報告された。邵雍氏は『点石齋画報』、『図画日報』に描かれている妓女から、歴史を再構築していく。さらに姚霏氏は、「図像学」の方法論について、具体的な史料と共に紹介してくれた。これらの研究からは、文字に定着していない資料から、歴史を再構築する刺激的な試みであると言えよう。また、現在の上海を事例として、韓智恩氏は、現在の上海の都市計画が、近代の「歴史景観」を再利用していることに注目し、近代史を戦略的に用いようとする意識を洗い出していく。さらに石川照子氏は、ジェンダーの視点から、具体的なアンケート

調査に基づいて、上海に働く日本人女性の現状を分析した。

以上、第三セッションから、私は歴史学における最新の成果を、具体的に知ることができた。このように、他分野の研究者との交流も、今回のシンポジウムの大きな魅力の一つであった。

最終日の第四セッションは、本シンポジウムの参加者にとって、最もラッキーなセッションの一つだったに違いない。

文字資料もさることながら、映像、音声資料は、本当に手に入りにくい。そんな中で、張景岳氏の報告は、のっけから刺激的だった。この報告は、一九二七年にソ連のグループによって撮影された上海の記録フィルム『上海紀事』を、実際の映像を紹介しながら、その史的重要性について議論するというものである。都市のモダニズムを研究している私としては、永安公司の屋上で炭酸水を飲み、チョコレートをかじる人々、それに郊外で麻雀などをしながら余暇を過ごす人々が印象的であった。文字の中でしか知りえなかった風景を、実際の映像で目の当たりにできる喜び。ああ、たまらない！

他にも、富井正憲氏は、一九四〇年当時のソウルを映したフィルム、清水宏監督『京城』を特別に持ってきてくださった。富井氏による懇切丁寧な解説（通訳は徐青氏）がまた魅力に富んでおり、途中で時間オーバーしてしまったものの、司会の謝俊美氏の「最後まで見ましょう」という意見に、反対する人は誰もいなかった。こうした魅力的な映像に幻惑されつつ、張姚俊氏と劉暢氏のラジオ、映画館に関する報告によって、社会的な裏付けが取られていく。貴重な資料に着実な議論。研究の楽しみとは、こういうものではないだろうか。

最終日の後半は、「国際シンポジウム」という肩書きに恥じない、国籍の越境を意識させる報告が続いた。例えば、徐青氏は一九三一年の日本の雑誌『犯罪科学』『上海研究号』を通じて、当時の日本人の上海に対する認識を分析する。内田青蔵氏は横浜居留地の下水道整備に着目して、西洋の衛生観念が日本の建築に及ぼす影響を考察した。さらに大里浩秋氏は、日本租界の研究として台湾における資料の蔵書状況、それに租界研究における態度について報告を行う。ラストに、田島奈都子氏により、中国モチーフが用いられたポスターが、膨大な資料と共に紹介されて、私などはトドメをさされたのであった。

以上、駆け足でシンポジウムの様子を報告したが、その濃密な内容が伝わっただろうか。報告の多さのために、

討論の時間がなくなってしまったのは残念であるが、その辺りは夜の交流会でカバーできたと思う。聞くところによると、すでに来年のシンポジウムに向けて、準備が進められているらしい。今後の発展も予感できる、大成功の結果になった。

最後になってしまったが、我々を温かく迎えてくださった上海師範大学人文学院の蘇智良氏、日本側のまとめ役に徹してくださった神奈川大学非文字資料研究センターの大里浩秋氏、孫安石氏、さらに今後の交流について具体的な提言をしてくださった韓国のソウル市立大学都市人文学研究所の金承郁氏、韓智恩氏に、この場を借りて感謝を申し上げたい。

（城山拓也氏の参加記は、雑誌『東方』第375号、2012年5月号に掲載された文章を、著者と『東方』の許可を得て転載したものである。）



写真3 参加者記念写真
前列右：上海師範大学人文学院 蘇智良教授
前列中央：上海師範大学校長 張民選教授